

# 香川の昔話

——縁起譚、由来譚をめぐつて——

谷原博信

## はじめに

昔話を採集していると、人形淨瑠璃などに出てくる「安珍清姫」や説経節の「石堂丸」さらに三井寺の鐘の縁起伝説である「俵藤太」の話、傾城阿波鳴門の十郎兵衛の話、それから「しんとく丸」「山椒太夫」などがいかにも昔話らしく語られているのに出合う。

中でも寺院の縁起として語られている「当願暮當」説話、「右衛門三郎発心譚」「弘法機」「継子の釜茹」などの説話はその顕著な

例である。今これらの話にふれながら香川の昔話の特色を考えてみたい。香川の昔話の特色として、その伝説性と宗教性についてすでに触れられているところである<sup>(1)</sup>が、今一度検討を加えてみたいと思う。

蛇蟄入りの昔話のようなものはある特定の家に結びついて伝説となり、狐女房は安倍安名という人物について語る。鶯の育て子は良弁僧正について語る。宝手拭は弘法大師について語る。このように

家や人物の伝説となるものと、今一つは神社の縁起になる昔話もある。蛇蟄入のおだまき型の話で糸をたどるとある神社の淵に到るというのがそれである。また猫檻家のような話になるといろいろな寺に自然に結びついて語られる。多度津の多聞院、長尾の慈泉寺、三豊の弥谷寺、滝寺、大窪寺などその数が多い。この他「宝手拭」は切幡寺に、「山寺の怪」は長尾の宝蔵院に結びついて語られている。この他塚の由来などを語るものもある。これらの昔話を見るとその土地に結びつきやすい内容であることが考えられる。

## 一

先ず四国八十八か所札所八十六番の志度寺の縁起である「当願暮當」の話は東讃から中讃、さらには西讃の三豊郡にまで分布している。

志度寺縁起は七巻あり、(1)御衣木縁起、(2)讃州志度道場縁起、(3)白杖童子縁起、(4)当願暮當之縁起、(5)松竹童子縁起、(6)千歳童子蘇生記、(7)阿一蘇生之縁起がそれである。これらの縁起文は縁起絵

(六幅の掛絵の縁起)と共に志度寺の宣伝の為に「絵解き」の台本として読まれていたものである。第三巻の白杖童子の最後の落慶供養の情景を次のように述べてい。

其の時之儀式法会之為軀堂上堂下之饒刹利之莊嚴の如し。財供財施之粧須達之奉獻に同じ。十種之供養五色の瓔珞、金玉之光耀、香花之芬郁、(管)宣絃之調、舞樂之曲、梵唄之声、錫杖之響、

目を悦ばし耳を驚かすのみ。信を發し心を勤め、天神地祇影向之瑞を顧し、如來菩薩隨喜之感を垂る。或は尊、或卑、參詣之男女幾万雲之如し。聽聞之老少群を成す。是の如く供養の讚嘆已に終る之後夫妻共に出家し往生極樂の素懷を遂げ畢はりぬ云々。

件の供養之日二人の獵師有り。一人を当願と名づく、一人を暮當と曰ふ。焉に於て当願者聽聞の砌に至りて邪執を起す故に大蛇の身と成る。暮當者哀愍を以ての故善知識と作る。之に依て当願即ち宝珠を暮當に与ふ々々。又彼の珠を皇帝に献ず、然る間、勸覺に預り富貴を得、其の因縁別記に在り。(本文は漢文)

この後に「当願暮當之縁起」がある。つまり延略の頃、山城の淀の津の馬借である白杖は死んだけれども生前一宇建立の志があつたために琰魔王の氏寺である志度寺の再興のため、地獄から返されたのである。帰る途中讃岐の国司庁の一萬長官の娘にあい共に命ぜられて生き返り、夫婦となつて志度寺を再興した時の落慶供養の日の出来事がつまり「当願暮當」の話になるのである。そして絵図の方

は第四軸の下から上へ描かれているのがこの二巻の縁起である。したがつてもともとの白杖童子縁起と当願暮當縁起とは一続きのものであつたのである。志度道場の創建や再興修造を語るのが本来のものであるなら、この当願暮當之縁起は本来の目的からはずれた内容である。つまり附属縁起とでも言えるのである。

志度寺の落慶供養の時志度の獵師当願は寺に參詣したもの聞法の心がなかつたため大蛇の身となつてしまつた。弟の暮當は兄の当願を助けて帰り満濃池に入れてやつた。三日後見に行くと大蛇が出て左の目を抜いてそれをかめに入れて酒を造れといふ。弟暮當は帰つて酒を造るところでも尽きない酒が出来富豪となつた。妻が不思議に思い夫のいない留守にかめを調べたところ玉が出て来た。それを聞いた目代はその玉をとりあげ、国司を経て朝廷に奉つたところこの玉は一双であろう。なお一つの玉を献上するようとの命令があつた。暮當はそのことを当願に告げる大蛇は残りの眼を与えたので朝廷に奉献したのである。なおこの玉が如意宝珠である。

朝廷ではこれを宇佐八幡に奉獻しようと船で運んでいる途中、使いの伊四郎滝口が周防の味噌島の近くで遊女の貴主と遊びその玉を見せようとしたところ、竜神に奪われた。貴主は海に潜つて玉を奪い返し舟中に入れたが腰より下は鰐に食われて死んだ。滝口は珠を捧げて陸に上り宇佐に至つた。

四国八十八か所の靈場の起源を探る説話として狩人の話があちこちに伝えられているが、この説話は第二十番鶴林寺の伊三太の話、

第三十七番岩本寺の貧しい狩人の話、さらに第六十六番雲辺寺の与一与成の話など狩人発心譚の系統と考えられている。この当願暮当の話が民間に流布すると二つの語り方に分かれるのである。

(1)、兄弟の獵師がいて兄は信心でお寺へ参りをし弟は獵に出た。兄は蛇になり満濃池に入れ、それでもかなわぬので大槌小槌島の間の海に入れてもらった。

(2)、今一つはその後雨が欲しい時にはそこへ酒樽を入れると雨を降らすという雨乞いのモチーフが附加されているのである。その例を次にあげる。

ある家におどい子があつたんじや。兄弟がな。一人は獵するんをものすごく好きであつたんやと。もう一人はの、お寺参りするんが好きであつたんやと。そこでまあ、お寺へ参る兄がな、まあお寺へ参つとったんやと。そしたらな、ズドーンというて鉄砲の音がするんやと。「まあ、なんまんだぶつ、南無阿弥陀仏。なんまんだぶつ。今はどうしたんだろに、大きな音がしたが。ほんまにわたしの弟が鳥を撃つたんでないだらうか」言うて念佛唱えもつてお寺へ参つとったんやと。そいでしたら、弟がやつぱりそれ、撃つとったんであつたんや。弟はもどつて来てからにな、話したんじやつて。そいでしたら、兄は「もうこなになにするんやつたら、もうここにおれんでないか」いうて言うたんやと。そしたら「わたしがおまえがそなにするんであつたらここにおれんけに、どこぞへ行こうかしらん」って兄さんがな言うんやつて。そんで、兄さんは信心であつたから三谷三郎（池）へ行つたんやと。三谷三郎へ行たところが、三谷

三郎は九十九谷しかないんじやと。そいでおれんのやと。ほいで、鉄砲はお上にとられるしして弟はしょっちゅう兄のそばへ来るんやと。ほんで「何かくれ、何かくれ」言うんで「この目をやるから目酒をつくれ」と言つて兄が目を一つやつたんじやて。そこで弟はめえ酒という酒を造りよつたんじや。それがおいしいからなんぼでも売れるんやて。ところが昔のことやけにお殿さんにひこずられたんやて。ほいで今度また泣いて兄さんのそばへ行つたんじや。「とられてつまらんけに」言うてしたら兄さんが片方の目を掘つてくれたんやと。そいだら兄は両目がないでしょが。「もうくれ」と言うて来てくれるな。もうわしは両方の目がないぞ」と。しゃあけに三谷三郎にいる蛇は両目がないんじやと。ほいで、夜の間に三谷三郎は九十九谷しかないけに三谷三郎では住めんけに言うんで今度は満濃の池へ逃げて行たんやと。満濃の池でな、どうやつても暮らすいうてな。満濃の池は田んぼがまんたんあるんやと。しかし満濃の池も浅うてな、おれんのやと。「こんな所にはどうも住めんから」いうて今度は大槌小槌の間へ行たんやと。西の。ほいで今も舟が通るのに大槌小槌の間に波が荒いんやと。ほいで、たまには大槌（島）の上へあがつて、（まつ白な蛇言うたぜ）大蛇がねよるという。ほいで、大雨が降つた時には酒一本ぐらいくれえと言つうそうな。また大酒を持っていつてあげたら、いつその日には雨を降らしてやるから待つとれよというて、「百姓の衆は待つとるんやと。待つとつたら大雨が降つて来るんやと。

こうして見ると縁起の方は「狩人発心譚」「蛇女房（盲目の蛇）」

「海女の玉取り」の三つの説話の複合したものであるが、民間に流布したものは海女の話がなく、雨乞いの話がそこに附加されているのである。なお、県内では蛇女房の昔話は七話ほどこの縁起と関係なく語られている。盲目の蛇の物語は三井寺の晩鐘の縁起にもなっているので三井寺系統の説話運搬者でしかも盲目の座頭などがいたのではないかと考えられている。<sup>(3)</sup>

縁起の成立は鎌倉時代末と考えられているが、閻魔堂を建てそこに十王像や地蔵菩薩を安置し、参拝者に縁起絵図を見せて絵解きをしていたものと考えられている。こうすることによって七巻の縁起は広く知れわたつたと思われる。ことに旧六月十六日の十六度市、旧七月十日の千日参りには盛んに絵解しが行われていたものと思われる。

この地方の伝説では当願は行長部落の出身の猟師で今も当願屋敷跡があり、当願堂まで建立されている。これは雨乞いの神として信仰されているのである。つまり伝説では雨乞いの神となっているのである。

縁起と伝説との先後関係は不明であるが、縁起文の中には次のようにある。つまり当願が満濃の池に入るや「妻子眷属并に暮当をはじめ村老邑女耳目お驚かすと云事なし」誠に希代未聞の奇特なれば天下に流布せる物語とそなりにける」とある。この後眼を抜く話に続くのであるが、この作者の感想を見るとこの縁起が書かれている時すでに当願暮当説話は一般に流布していたようにも思える。今日のようなしつかりとした説話でなくとも、あるいは次のような

話があちこちに流布していたのではあるまいか。

昔、浅野の向井家にきれいなお嬢さんがあつたそう。その人が病気になり「水をくれ、水をくれ」というのでどびん何度もましだが、それでもかなわぬので四斗ごみをすべて水をえていた。ところがそれでも不足した。すると知らぬ間に娘は舟岡池へ入つた。しかし、この池でもおれず満濃池へ行き、そこで蛇になつた。これは香川郡香川町浅野の山本クニ姫の語ったものである。体が熱くなり蛇になり池に入るという話で、これは同時に蛇成長の物語である。こうした素朴な話があつて、それが縁起の作者によつてとりあげられたのではないか。つまり「蛇女房」説話と当願暮当つまり狩人譚と海女の玉取りの説話、以上三つを複合して創作したものが縁起文ではなかろうか。

本来は度寺の縁起であったこの物語がどこの寺でも語られるようになり、他の六つの縁起より広く県内に行きわたつたものと思われる。だれでも唱導弁舌を聞く時は邪執をおこさず「見仏聞法の心ざし」を忘れるでないと戒めるためにはこの当願暮当の話が最もふさわしかつたものと思われる。

また民間に伝えられている当願暮当の話で大蛇が大槌小槌の海に入るという話は、ちょうどこの海が龍宮の門にあたるという伝説となつてゐるところから仕組まれたのである。蛇の成長する話は世界的に分布し信仰の対象としての蛇は人間に福も禍もたらすと考えられている。ここでは目を与える、さらに雨を降らせる。つまり人に幸福をもたらすものとして描かれている。こうした水の神の信仰がこうした説話を生んだと思われる。

次に昔話の伝説性とともに弘法説話をとりあげてみる。県内でもよく聞かれる話に「右衛門三郎発心譚」がある。次の話は坂出市櫃石島の東山トヨさんの例をあげる。

ある時、貧しいなりをした坊主がお椀を持ってある家へ物乞いに来た。その坊主、実はお大師さんであったそう。ある家の門でおがんでいたら「この坊主め、きのう来て通れと言うたのにまたふせやがった」とがいに怒ったのに、その坊主が毎日毎日やって来た。けれども何もやらず怒り怒りする。それなのに毎日来よつたん。そしたら一週間ぶりにその人がまた来たそなう。「この奴は通れというのに毎日ふせやがる」言うて、その主人が出て来て怒つて棒持つてお椀を叩き割つた。それが七つに割れてしまった。そしたら、その主人の子が七人おつたそなう。その子が二、三年の間にみんな死んでしもうた。このことが起つてからこの主人は改心をして何度も四国遍路に出かけ途中大師にあわれ自分の罪を悔いたというのである。この主人公がよもん三郎であったのである。

この話は右手寺の縁起がもとになつてゐるが、遍路を歓待しない者を強く戒めることがその主題となつてゐる。回心した右衛門三郎は仏教的作善で功德を積むことによつて罪滅ぼしをしたのである。この話は「四國靈場御巡行記」「四國靈場記」におさめられており、この記録では右衛門三郎が死んで再び生まれて来る時手に石を握つ

ていたことによつて、安養寺を改めて右手寺としたとなつてゐる。松山市平和通りの和田政代さんの語りではほとんどこの記録と変化がない。右手川の伝説にもなつてゐる。

私の昔話採集の体験では、県内どこへ行つても聞くことのできる話で、これは遍路によつて伝播されたものである。そしてどちらかと言えば、こちらから遍路に出かけて話を聞いてきたものである。かつては農閑期には四国遍路に徒步で出かける人は多かつた。今までこの習俗は続いている。したがつてその道中になつてこうした寺の話を聞いて持ち帰つたのである。中には「宝手拭」の昔話に右衛門三郎が登場する話もある。巡礼の場所は小豆島の島四国になつている。しかも杖立杉の伝説まで附加されている。こうした類の話はいくつもあり、これが弘法機の話になると「切幡寺」の伝説となる。要約すると次のようになる。

ある時弘法大師が機を織つてゐる女性に「お手水手拭を一尺くれないか」と乞われると心よく与えた。何度乞われても心よくもてなしたので大師は何んでも望みのものをかなえてやろうというが女は何も望むものはないといつて求めようとしてない。大師はその心に感じ布をもとどおりにしてやり、機ごと女を抱えて山へ上がり女を観音さんとして祀り、機は寺の前の池の中に投げ捨てるとそれから芽が出てかしの木に成長した。この寺を切幡寺（十番札所）といふ。

こうした話は「大歳の客」の昔話を聞き出そつとする時に語られるのである。切幡寺の伝説も遍路の伝播によると考えられる。ここでは遍路のことをヘンドというがそのヘンドの話をもう一つあげる。

（香川町浅野 青木ヨシ子）

へんどがある家を訪ねるがそこの主婦が心よくもてなし、一番風呂に入れた。ところが主人が帰り自分よりへんどを先きに風呂に入れたことを怒り水を抜きかえ再びわかす。そして主人が風呂に入つたところ下水板が尻にひつついてとれず、主人は悔いて遍路に出かける。下水板のついたまま乳母車に乗つて出かけその功德により板がとれたということである。この話は私の採集だけで五話にあまつてある。いかにも実話風に語るところに特色がある。

いざれにしても外來者、ことに遍路を歓待しないと罰があたるということで、冷遇もしくは虐待する者を戒めた話である。このへんどの話はニジリヘンドといって足腰の不自由な遍路を想起した話であらう。ニジリヘンドは木の輪のニジリグルマに乗つて手でごまをまわしながら遍路に出かけるのである。中には犬に引かせることもあつたようで、このようなへんどが来ると村人は村境までおして行き、さらに次の村人がそれをおすといった風習もあつたという。なお、この車をおすことによつて何かの供養になるという考えがあつたのかも知れない。いざれにしてもこうした習俗がこのような説話を支えていたことは事実である。きたないへんどを一番風呂に入れるとというのは善根宿の民俗が反映した話で、こうした民俗は四国各地で行われていた。四国遍路の中には乞食へんろもあつてこれをケイシコクとかクイコクという。そうした乞食を心よくもてなす家もあり、ま新しいふとんを作るとこうした遍路に使つてもらう。すると病気をしないとか縁起が良いとかいうのである。

こうした旅人が中世にあつては大師の身代り、阿弥陀如来の使者という古い信仰にまで遡ることができるようだ。さらに古代にあつ

ては遊幸神の信仰にその源を求めるができるのであるうが、これらの民間説話を見る時中世の遊行の宗教者は験者としてこの世にあらわれるという信仰に支えられて、いろいろな話の中にこれらの来訪者が登場してくる。これは同時にこれら遊行僧の宣伝してまわった名残りではないかとも思われる。

それが乞食僧であるうが修行僧であるうが布施することをすすめる。これは宗教的な作善であり、このような功德を積むことによって前世からの罪や死者のたたりといったものをまぬかれるという古い信仰をかつての聖たちは宣伝してまわつたのかも知れない。そうした話がこのような説話をとして今も残つてゐるものと思われる。

このように遍路の登場する説話を遍路説話と呼ぶなら、回国遊行する乞食僧の中にも隠身の聖人（弘法大師）がいることを説いてまわつたのではないか。そしてこれら隠身の聖人の話は各地に弘法伝説として伝えられている。弘法清水、食わざの梨などその数は多い。これらの遍路の話は呪術者として超能力を示す古代の聖の伝承が基となつてゐると考えられる。

こうして右衛門三郎発心譚も弘法機の話も弘法大師の偉業をありがたく説きあかすことによつて仏教的善根を誘引しようとするものである。こうした信仰が民間に浸透するとそれは彼等遍路の旅も容易なものになつたのである。

### 三

こうして大師信仰が広められることにより、大師の救いを語る昔

話も出てくる。「継子と釜茹」のよう単なる継子話で終らず、これも立江寺の地蔵尊の靈験譚となつてゐる。継子が遍路の菅笠を下水板の代わりにして釜茹の難から救われるという話である。要約すると、

河内の人人が二人の子供を継母にあずけて四国遍路に出かけ、十九番札所立江寺の地蔵の所まで来たところ今までかぶつていた菅笠がぽいと飛んでしまつた。その遍路は「何事が起つたのか早く帰つてみよう」といつて大阪の自分の家へ帰つてみると、二人の子供が憎くて継母は下水板を入れないで二人を風呂に入れてふたの上に石をのせてどんどんと火を焚いていた。父がそのふたをとつてみると二人の子供が「お父さんお帰り」といつて出て來た。それは立江の地蔵さんが子供を助けるために父のかぶつていた笠を飛ばして下水板のかわりにしていたのだ。そこで再びお父さんはお札参りに立江寺へ出かけた。

(香川町浅野、繁益キクエ)

これは、立江寺へお参りした時、寺の院主から聞いたものだといふ。同じ話が「井内谷昔話集」(武田明編)にも出ており、こちらは子供は死んでしまう悲劇になつてゐる。遍路に出た父親がお寺で「納経の札を貼るのにその日に限つてなんば貼ろうとしても風に吹かれお札が貼れん」ので家へ帰つてみると子供が継母に風呂の中でき殺されていたという残酷な話になつてゐる。この話は遍路に出かけてその途中で起こる出来事に超自然的な意志をなものかによつて伝えられる。それがはつきりと立江の地蔵の靈験として語られるのが香川の話である。さらに同じ話を青木ヨシコ姫は次のように

語る。この話者は徳島県から嫁いで来た人であるが、実話風に語る。祖母から聞いたという。この話が単なる説話で終ることなく体験談となることによつてその寺の本尊、あるいは弘法大師の援助の徳がたたえられ、いつそう弘法信仰を強化することが出来たのである。要約してみる。

父親が小豆島の島四国にお参りに出ると菅笠とお札が次々となくなるのである。不思議なことがあるに違いないと思つて自分の家のある大阪へ帰つたそな。家には子供を継母にあずけておいたのだが、継母は子供を風呂に入れて焚き殺すうとしていた。ところが子供は菅笠を尻に敷いて体中にお札をいっぱい付けて笑つっていたそな。これを見て父親はお大師さんの道はありがたいと思いその子供を連れて参つたといふ。その時に話してくれた話だというのである。

これと同じ話を木本島の田中トク姫は次のように語つてくれた。<sup>(13)</sup> こちらの方は主人がお大師さんを信仰してある寺のお大師さんを参拝に出かけた。継子と子供がいて、あるとき母親が風呂をたいているのでがふたの上に石を置いている。中には子供がいるのだが、朝目をさました時、主人の持つていた遍路杖がない。継母は主人に風呂に入るようすすめるので父親はすすめられるままに風呂に入ると、子供は風呂の中で父親の杖にすがつて助かつてゐたといふ。その後その母とは離縁したといふのである。

これが他具、例えば長野県上伊那郡では父親が秋葉山にお参りしてそのお札がなくなつて、そのお札が子供の背中にひりつけられて助かつたという話になる。この他伊勢参りをしていて、そのお札で助かる話もある。

愛媛県上浮穴郡小田町水元の話では男がお四国に出かけていたが、寺の住職の所で納経しようとすると早く帰るように言われる。すると男のかぶつていた笠がひとりでに自分の郷里へ飛んで行くので急いで帰つてみると子供は釜茹にされているが笠を下水板がわりにしていたために子供は助かつたという話で香川の例と変わらない。同じ小田町の臼杵では金毘羅の木のお札の靈験を説く。日野川ではお大師のしわざで婆が死ぬ話になつていて、

高知県須崎市桑田山の話では、子供二人と後妻を残して男が四国遍路に出かける。男は小使いの錢を忘れたので取りに帰ると母親は子供を風呂で煮ていたので助けるのだがお大師さんのお札のおかげでやけどをしなかつたという話である。<sup>(15)</sup> 本来「縦子と笛」「縦子と鳥」の昔話の中で語られるものであるが、この釜茹の話は「味噌豆は三

里行つても戻つて食べるのだ」ということわざに基づいて語られる場合が多い。ところが四国の場合は金毘羅のお札を除いてすべて

四国遍路の笠や杖やお札の力、つまり大師信仰のモチーフによつて支えられているところに特徴が見られる。このように大師の信仰による教いを説いている昔話はこの他にも多い。「手無し娘」の昔話にも大師の救いを説いている。<sup>(16)</sup>

手の無いお松が子供を背負い弁当は持つてゐるが食べることができず困つていると旅の僧に出逢い、子供に乳をのましてもらい、弁当も食べさせてもらい、のどがかわくなら向こうの谷川の水をのむがよいといつて、そのとおりすると自分の手が自然に生えていたという話で、この僧は恐らく隠身の弘法であつたと思われる。今一つの話も同じ男木島の話であるが手の無い娘が井戸にうつる自分の

影を見て手が生えているのに気づき、お大師さんのおかげだと喜ぶのである。<sup>(18)</sup>

今一つは仲多度郡多度津町のもので、継母に手を切られ四国を巡礼してまわる。そのうち子供が産まれるが乳も飲ませられず困る。継母は継子のお杉を殺す策をねり、つけ人をつけお杉の子は谷底に落とされてしまった。お杉はこの手があればと嘆いていると崖の下から弘法大師が現われて両手を授けてくれる。お杉に手が生えたのは日頃信仰している賜物であるといふのである。この他お大師の援助による話は徳島県海部郡宍喰町、東祖谷山村などにも見られる。その他観音さんの救いによる語るものも見られる。<sup>(19)</sup> このようにお大師信仰の靈験が語られるのはひとり香川の昔話だけではなく、四国の中の特色とも言える。

#### 四

昔話の中に遍路が登場するものは多い。今でも四国八十八か所の巡礼姿を見ることができる。ことに農閑期には何人かを連れだつて八十八か寺を巡らなくとも、徳島や愛媛の、中でも比較的本県に近い寺々をまわる風は多い。また小豆島の島四国であれば三、四泊もすれば全部まわることから県内外から多くやつてくるのである。こうした習俗が昔話に反映して香川の昔話を特色づけている。その最も顕著な昔話の話者が「東讃岐昔話集」の木村ハルエ姫である。長尾町多和に住んでおり、この地は八十八か所結願の寺である大窟寺のある所なので、ことのほか遍路の数は多かつたのである。ここ

までたどりついて帰れなかつた遍路も沢山いてこの土地で死ぬ者もいたようで、したがつていたる所に遍路墓がある。姫の昔話の中から遍路の登場する昔話をひろつてみる。

○「半殺しにするか」これは「本殺し半殺し」で知られる愚人譚で山の中の一軒家へ道に迷つた遍路さんを泊め、それをもてなす。それからその遍路が狸をつかまえて手がらをたて村人にお遍路さんは感謝されるというものである。(二)話『東讃岐昔話集』二一頁、

以下同様)

○「大窪寺さんの石の香炉」これは猫檀家の話で大窪寺の隆盛を説く。(前掲⑩)

○「切幡寺の話」弘法機に分類される昔話で来訪者が遍路になつてゐる。心のやさしい娘は生き仏になり切幡寺の女の神様になる。(前掲⑩)

(前掲⑩)

○「化物屋敷」宝化物の昔話で遍路があき屋に泊ると女の化物が出てくるがそれを供養すると同時に宝物を得るという話でここでは遍路は人々の家に入つて司祭者になる。(前掲⑩)

○「運定め話」(水に溺れて死ぬ)産神問答でお遍路さんが金毘羅の神さんのお告げを聞く話になつてゐる。(前掲⑩)

○「お遍路さんと化物」一つ屋の怪、お婆いるかいの話で厄難を克服するのが遍路になつてゐる。いづれも人々を訪れて行くのが遍路である。(前掲⑩)

○「八栗山参り」首掛け素めんの話で出かけるのは八十五番札所の八栗寺である。(前掲⑩)

○「蛇と酒屋」蛇女房に分類されるが「当願暮當」の話の変形し

たものであり、もうからない酒屋が遍路に出かけようと相談している所へ若者が訪れ目酒の秘法を伝えるという話である。ここでは生活に困つてると遍路に出かけるというもので、現実にもそうした例はいくらもあつたのである。(前掲⑩)

○お駿迦さんの臨終 弘法大師がお駿迦さんの臨終に間にあわなかつたので独鉛を投げる話で独鉛など修行僧の持ち物に呪力があると説く話である。(前掲⑩)

以上の話はすべて武田明先生の採集によるが、四十一話のうち九話まで遍路か札所が出てくる。そしてこれら登場している遍路に対しては敬意をはらつてゐる。それは遍路信仰、大師信仰に支えられているためではなかろうか。

当願暮當の説話は説教の材料として用いられそれによつて県内各地に兄弟語として広められ昔話化されたと思われる。同時に雨の少い讃岐の気象を反映して雨乞いの信仰に結びついて語られることが多い。そして何よりも仏教的聞法の心の大切さを説いたところにその特色がある。右衛門三郎発心譚が県下でよく聞かれるのはその伝播者が地元の遍路であつたからである。旅の僧を歓待しない者を戒めるのがその主題となつてゐる。これは弘法伝説をはじめ下水板の話もその一つである。

これに対し遍路を歓待した者の功德をたたえようとするに重点をおいたのが「弘法機」「宝手拭」の昔話である。さらに「大歳の客」の昔話で遍路に宿を貸して黄金を得るという話もある。また「離子の釜茹」や「手無し娘」の話のように遍路の途中大師のおかげで救われる話もある。

このようにしてこれらの昔話はあるものは説教化し、あるものは無慈悲を戒める。またあるものは善根の徳をたたえたり、大師信仰

の靈験にあざかつたりする話になる。こうして大師信仰や遍路信仰（善根の心）といった宗教心を育てていったのである。そしてまた逆にこれらの宗教心がこれらの昔話を育てていったのである。香川

では東日本に多い座頭にかわって唱導を目的とする聖が象徴するような遍路（宗教家）がこれらの昔話を持ち歩いたのであるまいか。そして座頭の昔話が笑話化される一面があるのであるのに対し、遍路説話は宗教的唱導性をおびた脚色が顕著であるところに香川の昔話の特色の一つがうかがえるようである。

の「右衛門三郎とお大師さま」。

(9) 注(2)と同書、五六頁の「宝手拭」。

(10) 注(2)と同書、一〇三頁。

(11) 注(2)と同書、一六八頁の「継子と立江寺」。

(12) 注(2)と同書、七〇頁の「継子と風呂」。

(13) 注(2)と同書、「五八頁の「継子いじめ」」。

(14) (15) いずれも北九州大学民俗研究会「小田の民俗」。

(16) 坂本正夫「須崎市の昔話」（須崎市教育委員会）、六頁。

(17) 注(2)と同書、二三六頁。

(18) 注(2)と同書、二四一頁。

(19) 武田明「西讃岐昔話集」（岩崎美術社）、四〇頁。

(20) 武田明「井内谷昔話集」（三省堂）、三七頁。

(21) 武田・谷原「東讃岐昔話集」（岩崎美術社）、一四五頁の「大年の客」

(22) 香川の昔話の中にもわずかではあるが座頭は出てくる。

座頭のことをザットさんという。注(21)の同書の圓話の「難題算」に登場する。

(3) 注(2)と同書、九頁。

(4) 谷原博信「高松地方昔話集」（ふるさと研究会）、一五九頁、「兄弟の話」。

(5) 武田明「巡礼と遍路」（三省堂）、三〇頁。

(6) 注(2)と同書、一八九頁。

(7) 注(2)と同書、二八九頁。

(8) 和田良譽「伊予の昔話」（日本放送出版協会）、二一七頁